

第 2 章

子どものしつけ・教育観

木村 敬子



子育て場面での会話・行動の内容と量は子どもの成長とともに移り変わる。子どもが成長したと実感できることは、母親の喜びと自信の源泉となるが、今回も「成長したと感じる」が減少した。背景にある家庭状況を探る。

今回の母親の平均年齢は小1生の母親37.3歳から中3生の母親44.1歳へと学年順に高くなっていく。専業主婦の割合が小1生の母親の49.6%から中3生の母親の25.1%へと変化していくが、これは子どもの直接的な世話から少しずつ手が離れ、職業を再開し始める母親のライフステージを示している。子育て場面の項目を今回は17項目用意し、子育ての姿をとらえた。図2-1-1は全体6,770名の母親の回答結果である。会話に関する項目、行動に関する項目、そして子育て場面での意識の項目に分けて、「よくある」の多い順に配置した。

● 会話によるコミュニケーション

学年によって会話の内容は移り変わる（図2-1-2）。今日の昼間、何があったのか、学校で先生や友だちとどう過ごしたのか、教室や校庭や登下校でどのようなことがあったかを話題にすることが、まず低学年の母と子の会話では圧倒的に多い。その状態が変化するのは小5生くらいからである。一日のできごとを聞くかわりに、次第に勉強や成績のこと、さらには将来や進路の話もするようになり、社会のできごとの話も徐々に増えていく。そして中学生、とくに中3生になると成績や勉強の話がトップに躍り出る。これは02年調査と同じ傾向であった。

【学年による会話量】

学年によって会話の内容が推移していくことはわかったが、会話の量はどのなのだろうか。手がかりとして図2-1-2にある5項目への回答をまとめてみることにする。「よく

ある」に4点、「時々ある」に3点、「あまりない」に2点、「ぜんぜんない」に1点を与えて5項目の平均値を算出した。値が高いほうが「よくある」という回答が多いことになる。最大値4、最小値1、全体の平均値は3.24であった。図2-1-3は学年段階別の平均値を図にしたものである。会話の平均値をみると、学年が上になると会話の量はむしろ多くなり、小学校高学年と中学生がほぼ同じくらいでもっとも多い。進路や勉強について話し合う必要が高まってくるうえに、学校で起こることについても心配が増えてくるからであろうか。“手が離れる”どころか、ますます気がかりが多くなる子育て期である。

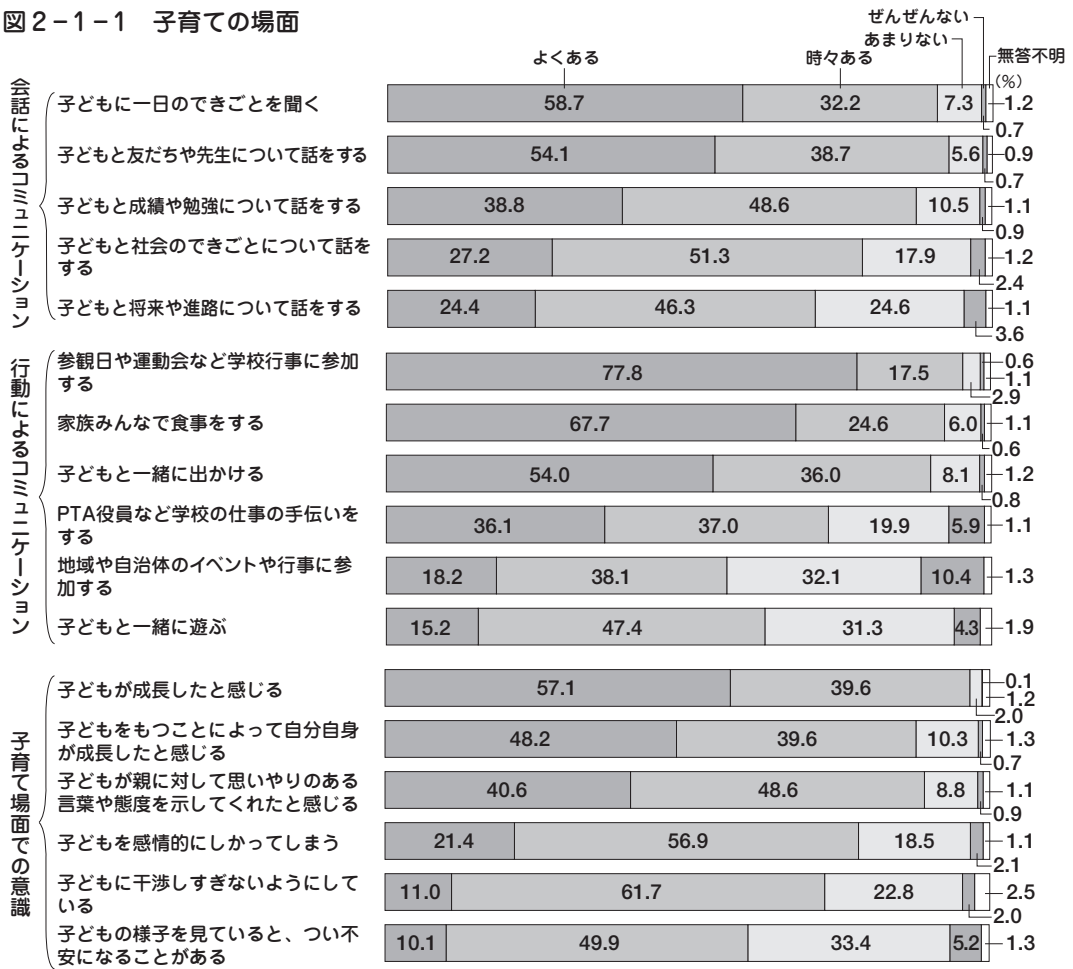
【会話量と母親の就業状況】

しかし、子どもが中学生にもなると職業をもつ母親も増える。そこで中学生の母親について就業状況別に会話の多さを算出してみると、専業主婦（836名）3.31、パートやフリー（1,434名）3.29、常勤（619名）3.23であった。専業主婦およびパートやフリーと常勤の間には開きがある。常勤の母親は子どもと話す量がやや少ないことがわかった。小学生の母親についても同様の結果がみられる（図表省略）。

【会話の多さと子育ての楽しさ】

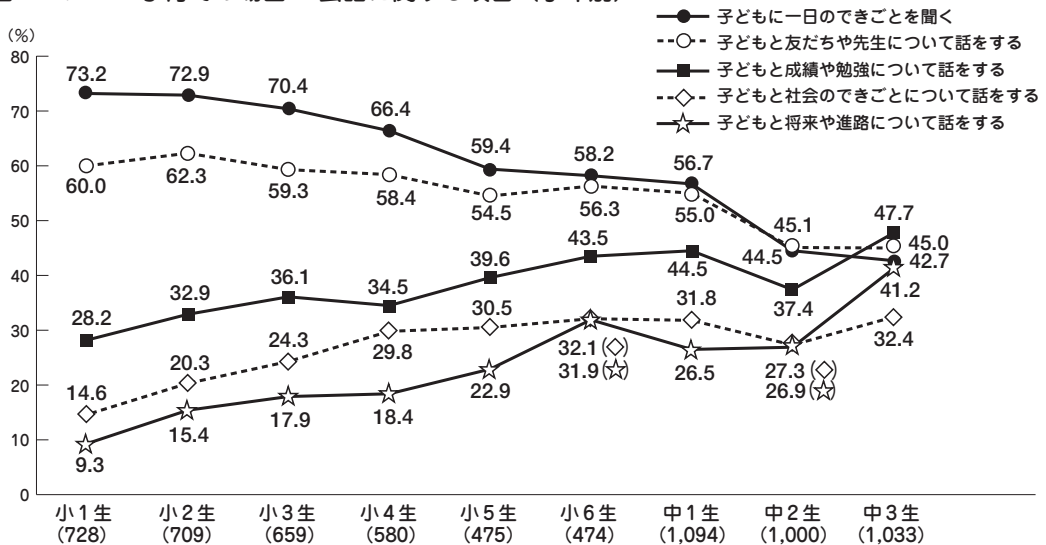
一方、会話の多さは「子育ての楽しさ」をたずねた回答と大いに関連していることがわかった。子育てが「とても楽しい」と回答した母親（1,342名）の会話量平均値は3.45、「まあ楽しい」（4,431名）3.24、「あまり楽しくない」（657名）2.98、「ぜんぜん楽しくない」（68名）2.68と、楽しくなくなるほど会

図2-1-1 子育ての場面



注) サンプル数は6,770名。

図2-1-2 子育ての場面・会話に関する項目 (学年別)



注1) 数値は「よくある」の%。

注2) () 内はサンプル数。

話の量が減少し、会話量に大きな違いがあることがわかる（図表省略）。まさに子どもと会話によるコミュニケーションをよくとっている母親は子育てを楽しんでいる割合が高いのである。では、就業状況別に会話量と子育ての楽しさについてみた場合はどうだろうか（表2-1-1）。常勤の母親は会話が少ないから楽しいと感じる割合が少ないかというところではなかった。実際、常勤の母親で会話が多い人も少ない人も、「とても楽しい」と答える割合が他の母親よりも高いことがわかる。常勤の母親の場合は会話の量に関係なしに子育てを楽しんでいる割合が高い、ということになる。

● 行動によるコミュニケーション

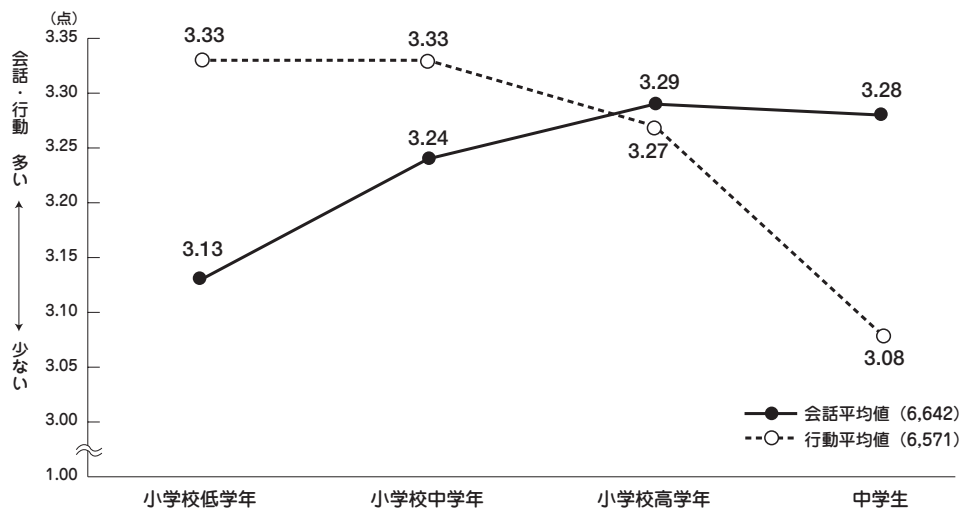
行動に関する項目は図2-1-1に示した6項目である。「よくある」という回答が02年調査と同じ順位となっている。図2-1-4は学年別に「よくある」の割合を示したものである。「家族みんなで食事をする」は全学年で60%以上を保ち続けるが、「子どもと一緒に出かける」と「子どもと一緒に遊ぶ」は中学生になるとぐっと少なくなる。

会話の項目と同様にこれら6項目をまとめて行動の量をとらえてみた。「よくある」4点～「ぜんぜんない」1点までを与えて平均値を出す方法である。この平均値を学年段階別に図2-1-3に示した。会話によるコミュニケーションが学年上昇とともに増えていくのに対して、行動量の平均値は逆に減っていく。学校行事への参加、子どもとの外出、子どもと一緒に遊ぶことが少なくなるということがわかる。

【行動量の違いをもたらす要因】

行動の量は何と関連しているのかを調べてみた。母親の就業状況（専業主婦の行動量が多い）、子どもの性別（女子の母親の行動量が多い）による違いが見い出された。そして会話と同様に、「子育ての楽しさ」との関連が目される。すなわち子育てが「とても楽しい」と回答した母親（1,328名）の、行動平均値は3.36、「まあ楽しい」母親（4,383名）は3.21、「あまり楽しくない」（650名）2.97、「ぜんぜん楽しくない」（68名）2.79と、行動量が多いほど子育てを楽しんでいることがわかった（図表省略）。

図2-1-3 会話・行動の平均値（学年段階別）



注1) 会話によるコミュニケーションの5項目と行動によるコミュニケーションの6項目の平均値は、「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として、無答不明を除いて算出した。

注2) 会話によるコミュニケーションの5項目、行動によるコミュニケーションの6項目の詳細は図2-1-1を参照。

注3) () 内はサンプル数。

表 2-1-1 会話の量と子育ての楽しさ（就業状況別）

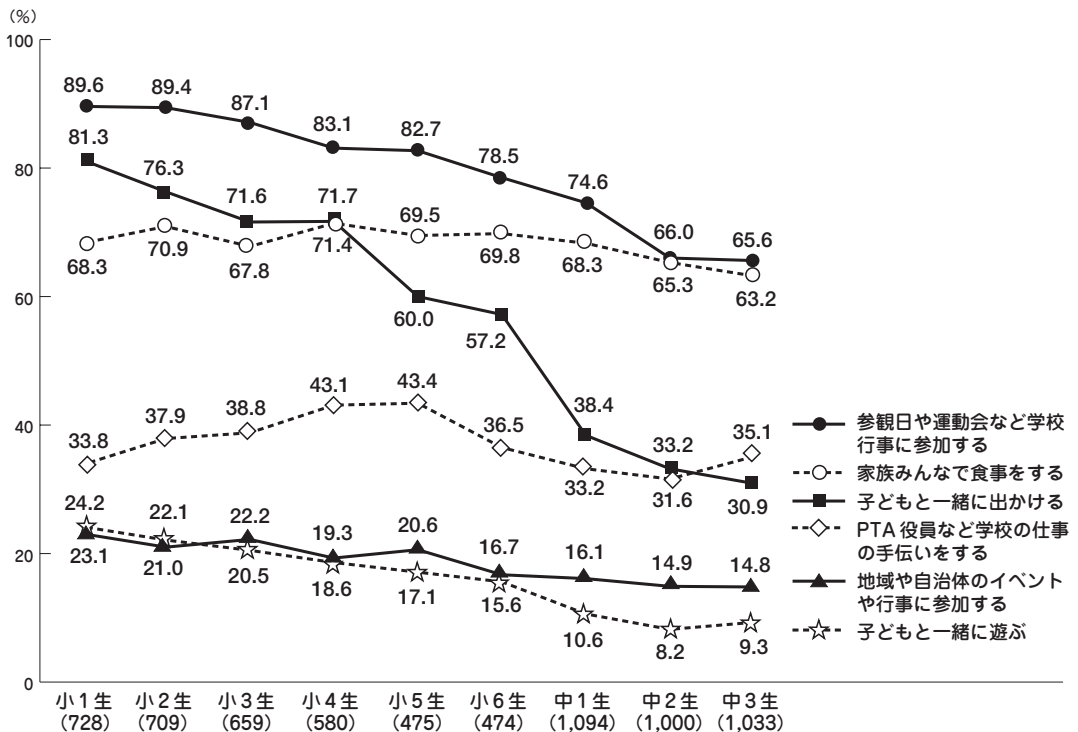
	会話の量 3 群	「とても楽しい」の%
専業主婦	会話平均値高群 (825)	26.9
	会話平均値中間群 (987)	18.3
	会話平均値低群 (492)	10.6
パートやフリー	会話平均値高群 (937)	29.6
	会話平均値中間群 (1,138)	15.6
	会話平均値低群 (627)	10.4
常勤	会話平均値高群 (379)	38.3
	会話平均値中間群 (525)	24.0
	会話平均値低群 (368)	13.3

注 1) 会話の量 3 群は「子どもと友だちや先生について話をする」「子どもと成績や勉強について話をする」「子どもと将来や進路について話をする」「子どもと社会のできごとについて話をする」「子どもに一日のできごとを聞く」について、「よくある」4点、「時々ある」3点、「あまりない」2点、「ぜんぜんない」1点とし無答不明を除いて平均値を算出し、平均値を高(3.5~4.0)、中(3.0~3.4)、低(1.0~2.9)の3群に分類した。

注 2) 「あなたは毎日の子育てが楽しいですか」の質問に対する回答「とても楽しい」について集計した。

注 3) () 内はサンプル数。

図 2-1-4 子育ての場面・行動に関する項目（学年別）



注 1) 数値は「よくある」の%。

注 2) () 内はサンプル数。

● 子育て場面で感じること

「子どもが成長したと感じる」「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」は約半数が「よくある」と回答し、「時々ある」を加えると大多数の母親が肯定的な感情を抱きながら子育てを行っている様子がかがえた（図2-1-1）。子育ての場面での意識について学年別に図2-1-5に示した。先述の2項目については小1生から中3生まで大きな差はない。しかし、「子どもが親に対して思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる」については、子どもが小6生になるあたりから減り始める。思春期に近づいて、親との関係が変わっていく様子が見えるようである。

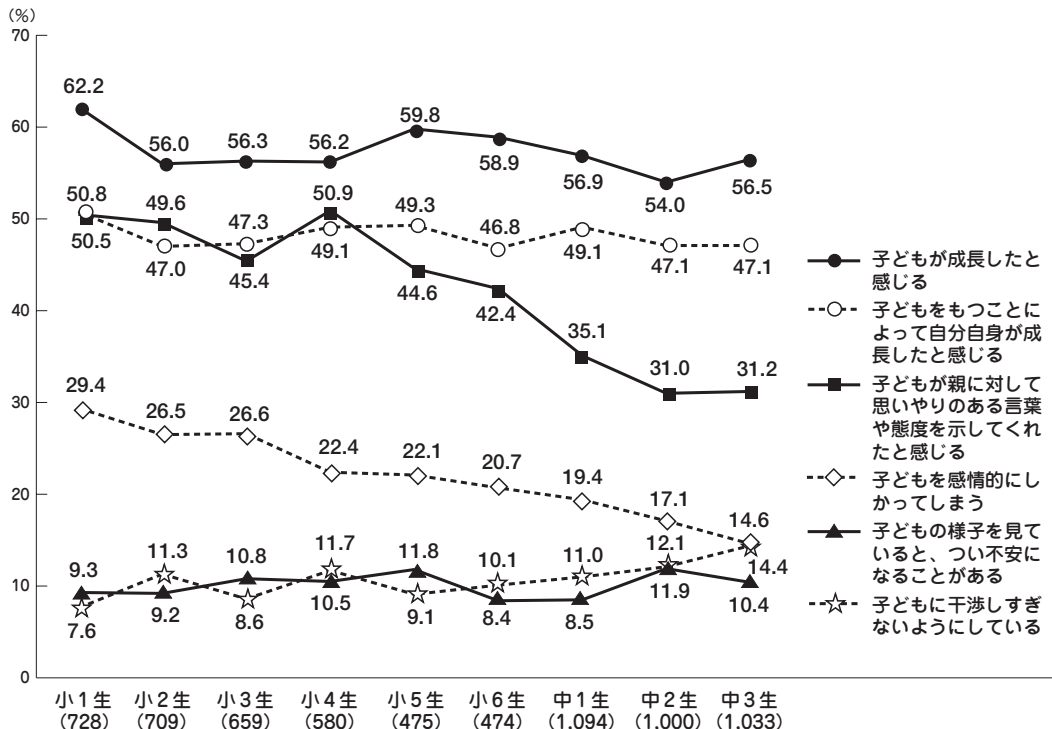
【注目される経年変化】

この子育て場面の意識については、02年調査で経年変化が目立ち、注目された。今回も肯定的感情を表す3つの項目で減少するという変化がみられた（図2-1-6～8）。学年段階別に平均値（「よくある」4点～「ぜんぜ

んない」1点として算出した平均値）の変化をみたのがこの3つの図であるが、とくに、「子どもが成長したと感じる」についてはどの学年段階でも減少していることがわかる。子どもが成長したと感じられるかどうかは子育て中の母親にとってはいわば「自己効力感」を得て、自信をもつことにつながる重要なことである。この調査でも「子どもが成長したと感じる」ことが「よくある」母親は、「子どもの生活習慣や自立の状況」に満足を感じ、「子育ての楽しさ」もかなり感じている。何よりも「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」割合が高く、母親としての自信を得ている様子がかがえる（図表省略）。わが子が成長したと実感できることは重要なことなのである。では、他にはどのような要因が関係しているのだろうか。

まず、詳細な数値は示さないが、年齢、家族構成等の属性、さらには母親の就業状況も関連がなかった。女子の母親が、また第1子の母親が「子どもが成長したと感じる」割合がやや高いが大差ではない。

図2-1-5 子育ての場面・母親の意識（学年別）



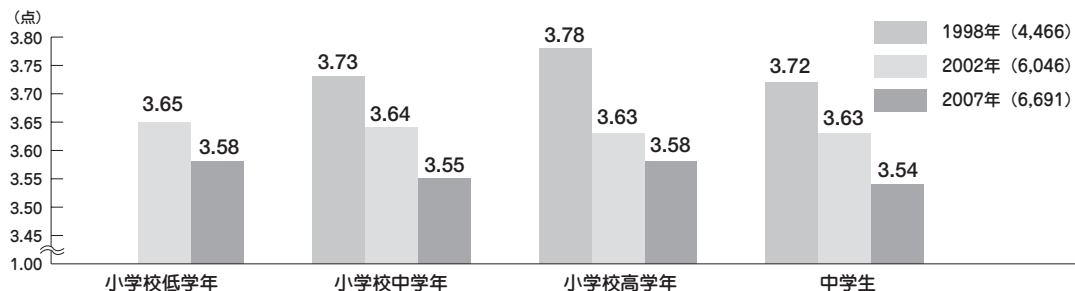
注1) 数値は「よくある」の%。

注2) () 内はサンプル数。

それよりも注目されるのは、その家庭の子育てに向かう姿勢である。「子どものしつけや教育については夫婦で考えている」かどうか、「配偶者は子育てに協力的」かどうか、「配偶者が子どもとコミュニケーションがとれている」かどうかなどへの肯定的回答と「子どもが成長したと感じる」ことには強い関連が見い出されている。

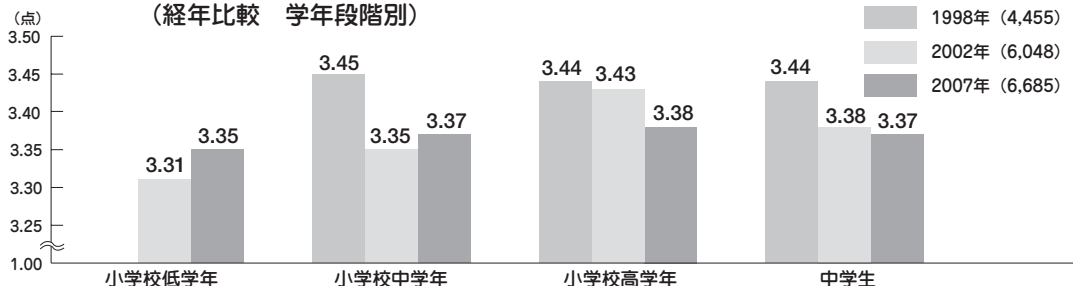
さらに子どもを信じるしつけも大切であるようだ。たとえば「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」母親は、「子どもが成長したと感じる」割合が高い（図表省略）。夫婦が協力しての余裕ある家庭教育の構えが子どもを成長させ、それが母親の自信につながり、子どもへのよい影響をもたらすという、循環がつくられていく様子がうかがえる。

図2-1-6 子どもが成長したと感じる・平均値（経年比較 学年段階別）



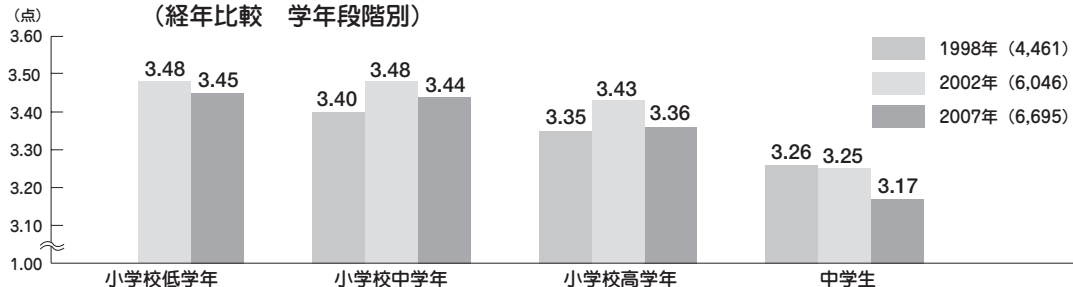
注1) 平均値は「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。

図2-1-7 子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる・平均値（経年比較 学年段階別）



注1) 平均値は「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。

図2-1-8 子どもが親に対して思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる・平均値（経年比較 学年段階別）



注1) 平均値は「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。

母親が心がけていることは人間関係を大切にすることや、自立に向けた基礎的なしつけが中心。低学年で、とくにこれらに力を入れる母親が増えた。ゲーム機のしつけは男子で、携帯電話のしつけは中学校へと進むにつれて、母親が心がける重要なしつけとなっていく。

子育てで心がけていることをたずねると、何が今、小・中学生の課題なのかがわかる。02年調査と同じ9項目に、「ゲーム機で遊ぶルールを決めている」「携帯電話の使い方についてルールを決めている」の2つを加えた。この5年間に激変したメディア環境や機器環境への対応のためである。「とても心がけている」の割合が高い順に全体の回答結果を示したのが図2-2-1であるが、上位3つの項目の順番は02年調査と変わらなかった。

● 人間関係の大切さ

「あいさつやお礼ができるようにしつけている」「友だちづきあいは大切にしている」「友だちづきあいは大切にしている」というしつけが今回も上位を占めている（図2-2-1）。人とコミュニケーションをとれること、友だちづきあいを大切にすることは学校や塾や遊びの場でも必要な基礎的能力であると考えられる母親が多いことを示すものであろう。母親はわが子がクラスのなかで上手にやっつけていけるのだろうか、ちゃんと遊び仲間に入れるだろうか、と気をもむ。あいさつやお礼のしつけ、友だちづきあいのしつけ重視にはそのような母親の心配が映し

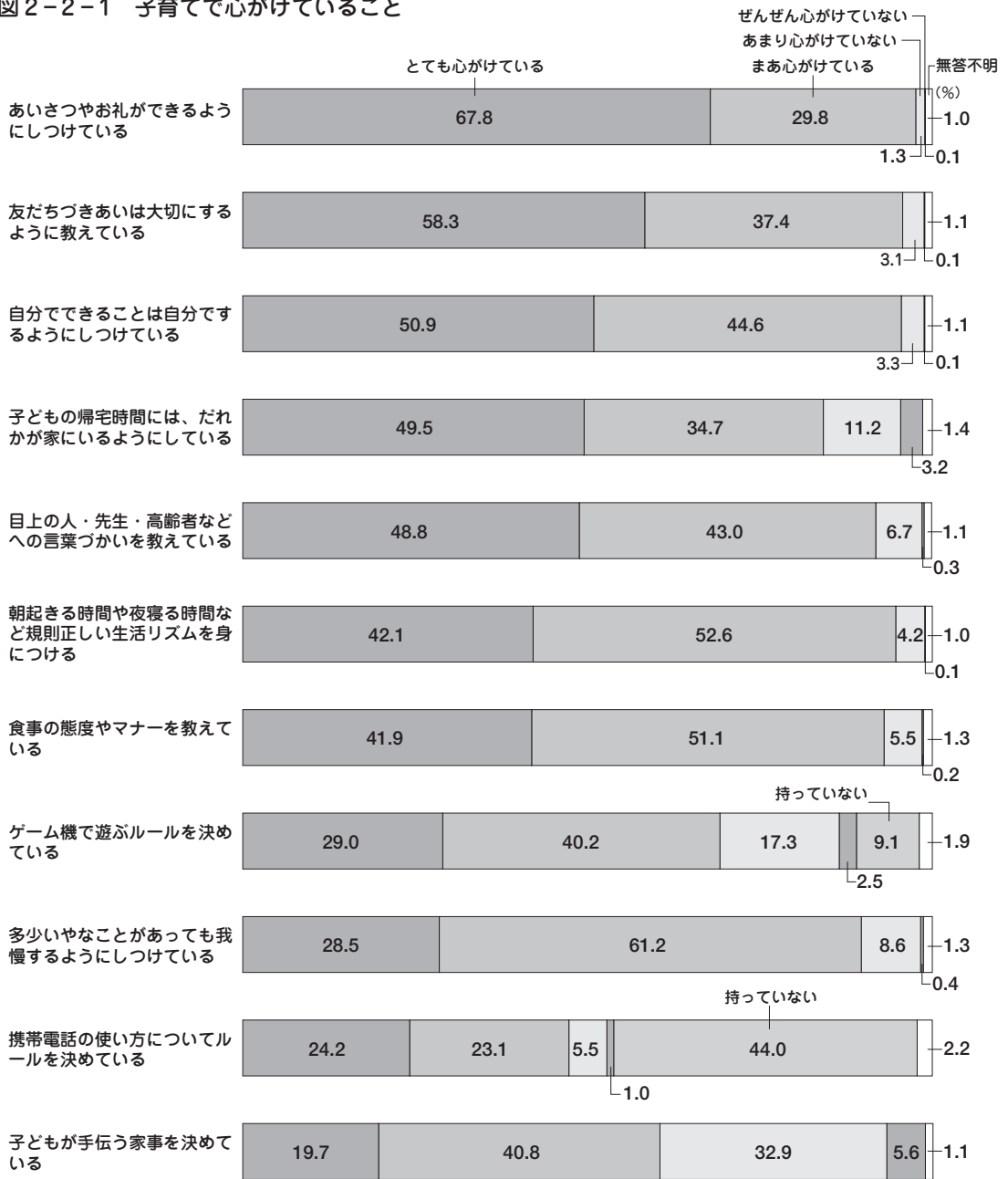
出されている。これら2項目のしつけは、図2-2-2にあるように、小1生、小2生の母親の多くが心がけているが、学年が上がるにつれて次第に減少していく。しかし、同じ人間関係の項目でも「目上の人・先生・高齢者などへの言葉づかいを教えている」については学年による違いはない。

● 基礎的なしつけ

子ども自身の能力を養うしつけ項目に分類されるのは、「自分でできることは自分でするようにしつけている」「多少いやなことがあっても我慢するようにしつけている」「食事の態度やマナーを教えている」「子どもが手伝う家事を決めている」などの自立に向けての基礎的なしつけである。

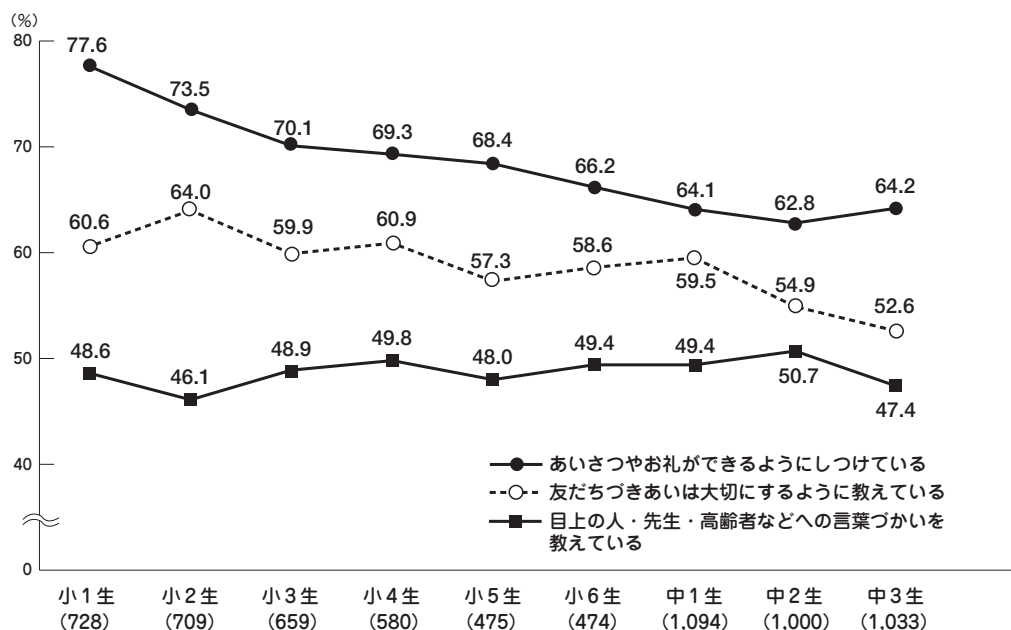
基礎的なしつけについて学年別のグラフ（図2-2-3）をみると、家事のしつけ（「子どもが手伝う家事を決めている」）以外は、やはり学年が下になるほど意識的に行われていることがわかる。前節で取り上げた会話と行動によるコミュニケーションの内容は、このような基礎的なしつけにあたるものであろう。

図2-2-1 子育てで心がけていること



注) サンプル数は6,770名。

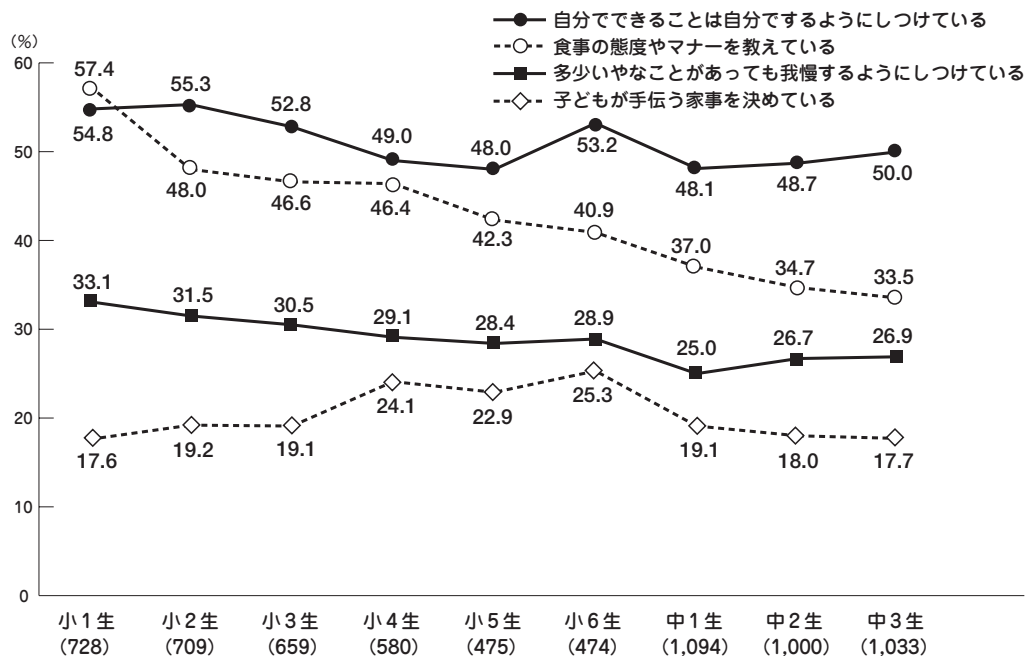
図 2-2-2 人間関係のしつけ（学年別）



注1) 数値は「とても心がけている」の%。

注2) () 内はサンプル数。

図 2-2-3 基礎的なしつけ（学年別）



注1) 数値は「とても心がけている」の%。

注2) () 内はサンプル数。

● ゲーム機と携帯電話

「ゲーム機で遊ぶルールを決めている」について「とても心がけている」のは全体の29.0%とさほど多くはない(図2-2-1)。しかしゲーム機を持っていない場合もあるので、学校段階別、性別に表2-2-1に示した。小・中学生ともに男子のほうがゲーム機を持っている場合が多いことがわかり、ルールのしつけも女子と比べ男子に対してよりしっかりと行われている。ゲーム機を持っている子どもだけについて算出しても同じように、男子の母親がより多くこのしつけを心がけていることがわかった(図表省略)。

一方、「携帯電話の使い方についてルール

を決めている」については、表2-2-2から、中学生のほうが所有者の割合が高く、小・中学生ともに女子のほうが所有率が高いため、しつけも中学生の女子に対して多く行われていることがわかる。しかし無答不明の回答を除く所有者だけについて算出すると、小・中学生ともに性差はなかった。小学生・所有者の母親の52.7%、中学生・所有者の母親の40.9%が携帯電話の使い方について「とても心がけている」としている(図表省略)。心がけていないという母親は少ない。子どもの性別にかかわらず注意を怠らないが、さすがに小学生に持たせるに際してはしつけに心がけている様子が見い出された。

表2-2-1 ゲーム機についてのしつけ(学校段階別×性別)

		ゲーム機で遊ぶルールを決めている				持っていない	無答不明
		とても心がけている	まあ心がけている	あまり心がけていない	ぜんぜん心がけていない		
小学生	男子(1,834)	40.3	37.1	12.1	0.7	8.7	1.1
	女子(1,776)	30.3	39.0	14.4	1.6	12.9	1.9
中学生	男子(1,674)	22.1	46.6	23.1	3.5	2.7	2.0
	女子(1,430)	21.0	38.0	21.3	4.8	12.0	2.7

注1) 学校段階または子どもの性別が無答不明の場合は省略した。

注2) () 内はサンプル数。

表2-2-2 携帯電話についてのしつけ(学校段階別×性別)

		携帯電話の使い方についてルールを決めている				持っていない	無答不明
		とても心がけている	まあ心がけている	あまり心がけていない	ぜんぜん心がけていない		
小学生	男子(1,834)	17.1	10.9	2.3	0.7	66.7	2.3
	女子(1,776)	19.0	14.2	3.5	0.8	59.1	3.3
中学生	男子(1,674)	29.3	32.8	7.4	1.0	27.5	2.0
	女子(1,430)	33.6	38.5	9.7	1.7	15.6	1.0

注1) 学校段階または子どもの性別が無答不明の場合は省略した。

注2) () 内はサンプル数。

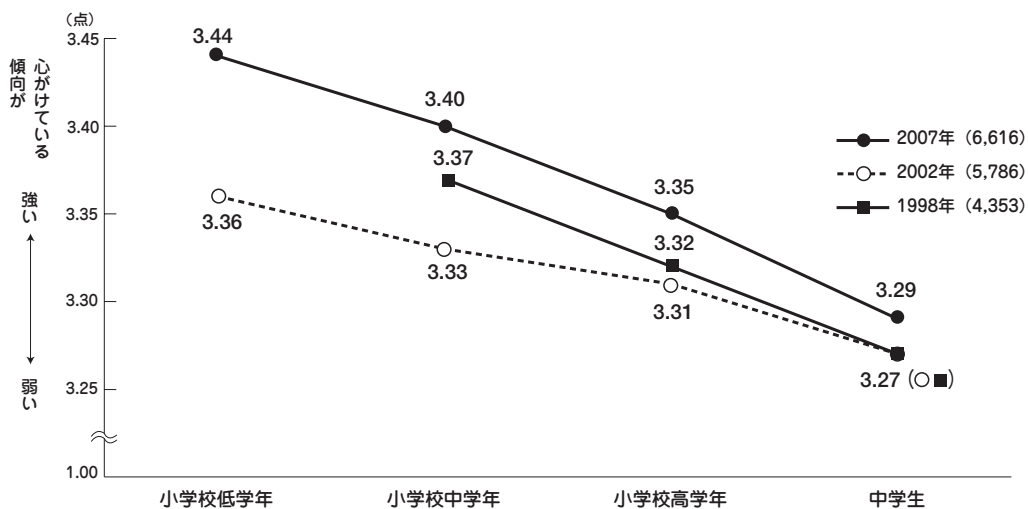
● 注目される経年変化

心がけているしつけの経年変化をみるために平均値を用いた。「とても心がけている」4点から、1点ずつ下げて「ぜんぜん心がけていない」を1点として平均値を算出した。値が高いほど心がけている傾向が強いことが示される。98年調査、02年調査そして07年調査の3回に共通の6項目（生活リズム、子どもの帰宅時間に在宅、あいさつやお礼、目上への言葉づかい、友だちづきあい、家事手伝い）をまとめた平均値で経年比較したのが図2-2-4である。学年段階別に比較してみると、変化が大きいのは小学校低学年の母親である。中学生の母親の平均値にはほとんど変化がないのに比べて、小学校低学年と中学年の母親は98年調査、02年調査よりもこれらのし

つけに強い配慮を行っている傾向があることがわかる。図2-2-5～7は先述した基礎的なしつけの3項目について、平均値を用いて02年調査との比較を示したものである。この3項目においても、02年調査と比べ今回は小学校低学年の母親の得点がとくに高いことがわかる。食事のマナー、我慢のしつけ、自分でするようにというしつけのいずれも02年調査より高く、また他の学年段階の母親と比較しても高い。

07年調査の小学校低学年の母親は02年調査に比べて専業主婦の割合も低くなり（02年調査50.5%、07年調査46.3%）、第1子の割合も02年調査59.9%、07年調査55.7%と若干少ない。今後の継続した動向把握が求められる。

図2-2-4 「心がけている」しつけ6項目・平均値（経年比較 学年段階別）



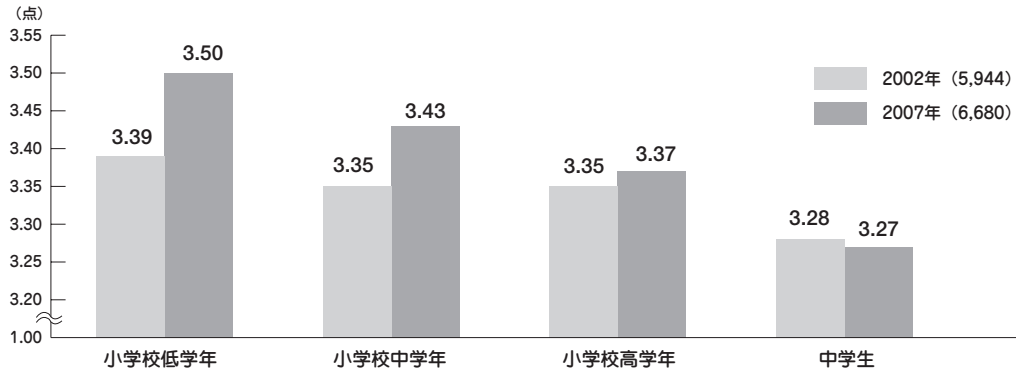
注1) 6項目とは「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムを身につける」「子どもの帰宅時間には、だれかが家にいるようにしている」「あいさつやお礼ができるようにしつけている」「目上の人・先生・高齢者などへの言葉づかいを教えている」「友だちづきあいは大切にできるように教えている」「子どもが手伝う家事を決めている」をさす。

注2) 6項目の平均値「とても心がけている」を4点、「まあ心がけている」を3点、「あまり心がけていない」を2点、「ぜんぜん心がけていない」を1点として無答不明を除いて算出した。

注3) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。

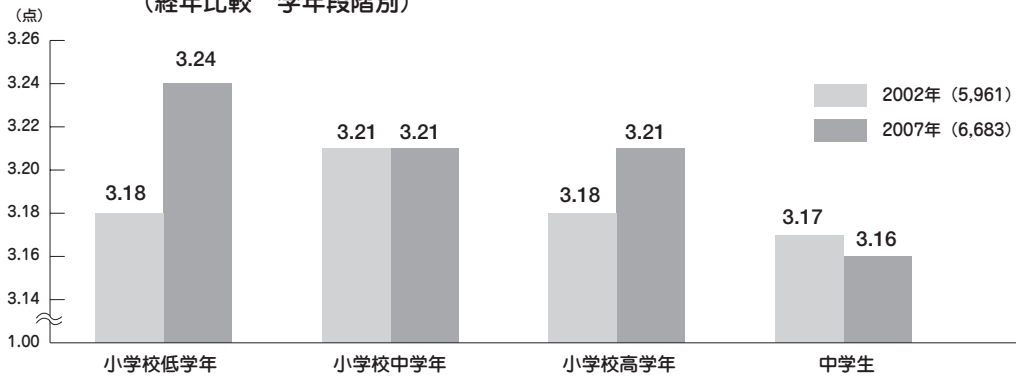
注4) ()内はサンプル数。

図2-2-5 食事の態度やマナーを教えている・平均値（経年比較 学年段階別）



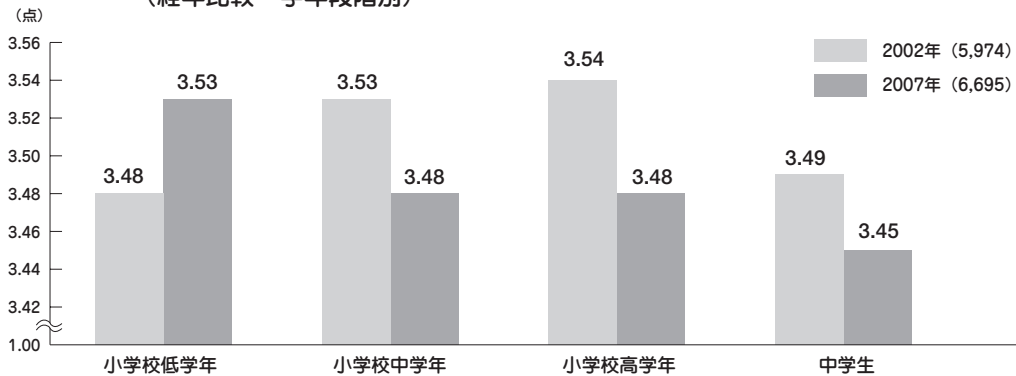
注1) 平均値は「とても心がけている」を4点、「まあ心がけている」を3点、「あまり心がけていない」を2点、「ぜんぜん心がけていない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では該当質問項目なし。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-2-6 多少いやなことがあっても我慢するようになっている・平均値（経年比較 学年段階別）



注1) 平均値は「とても心がけている」を4点、「まあ心がけている」を3点、「あまり心がけていない」を2点、「ぜんぜん心がけていない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では該当質問項目なし。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-2-7 自分でできることは自分でするようにしている・平均値（経年比較 学年段階別）



注1) 平均値は「とても心がけている」を4点、「まあ心がけている」を3点、「あまり心がけていない」を2点、「ぜんぜん心がけていない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では該当質問項目なし。
 注3) ()内はサンプル数。

今回の調査でもしつげに熱心な家庭が増える傾向がみられた。とくに、進学面でのしつげや進学準備熱が中学生のみならず、小学校低学年・中学年にまで広がってきたようである。一方では、夫婦協力してのしつげが中学生の母親で減少したことが注目される。

● 学年共通の家庭の方針

過去2回の調査と同じ8項目で構成した家庭の教育方針をたずねた質問では、今回も興味深い変化がみられた。経年変化をみる前に今回の全体の結果(図2-3-1)をみておこう。「とてもあてはまる」の多い順に並べたものであるが、順位は02年調査と同様であった。これら8項目を3つに分けて学年別の違いをみていく(図2-3-2~4)。今回も上位を占めた2項目である「子どもがどういふ友だちとつきあっているかを知るようにしている」「子どものしつげや教育については夫婦で考えている」は家庭教育の基本的な方針ともいえる内容であるが、図2-3-2にみるように、学年による違いは小さく、どの学年の母親にも高い割合で選ばれている。「子どものしつげや教育については夫婦で考えている」という項目は中3生がやや少ないが、他の学年では大差はない。

「子どものしつげや教育については夫婦で考えている」の結果と、07年調査で新しく加えた配偶者との関係についての質問との関連をみると、高い相関を示している。とくに「ふだんからご夫婦でお互いの関心事について話し合うことがありますか」という質問と

の相関が高い(図表省略)。1節で述べたように、夫婦が協力して子どもを育てる家庭の母親は子どもの成長を実感でき、肯定的に子育てをとらえることができる。この意味でこの質問への回答は今後も継続して把握する必要があるのだが、07年調査では02年調査よりも減少しているようである。これについては後述する。

● 学年によって違うしつげ方針

家庭のしつげ方針でも学年上昇によって次第に増加あるいは減少していくものもある。図2-3-3をみると「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」「親子で意見が違ふとき、親の意見を優先させている」の2項目は、学年が上になるにつれて減少していく。小学校低学年、中学年までは親が手助けをしたり、親の意見を優先させるしつげをしているが、小5生になるころから次第に減少し、子どもの自主性を重んじる方向に変わっていくことを読み取ることができる。このことは「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」が学年上昇につれて増加していくことにも表れている。

図2-3-1 家庭の教育方針

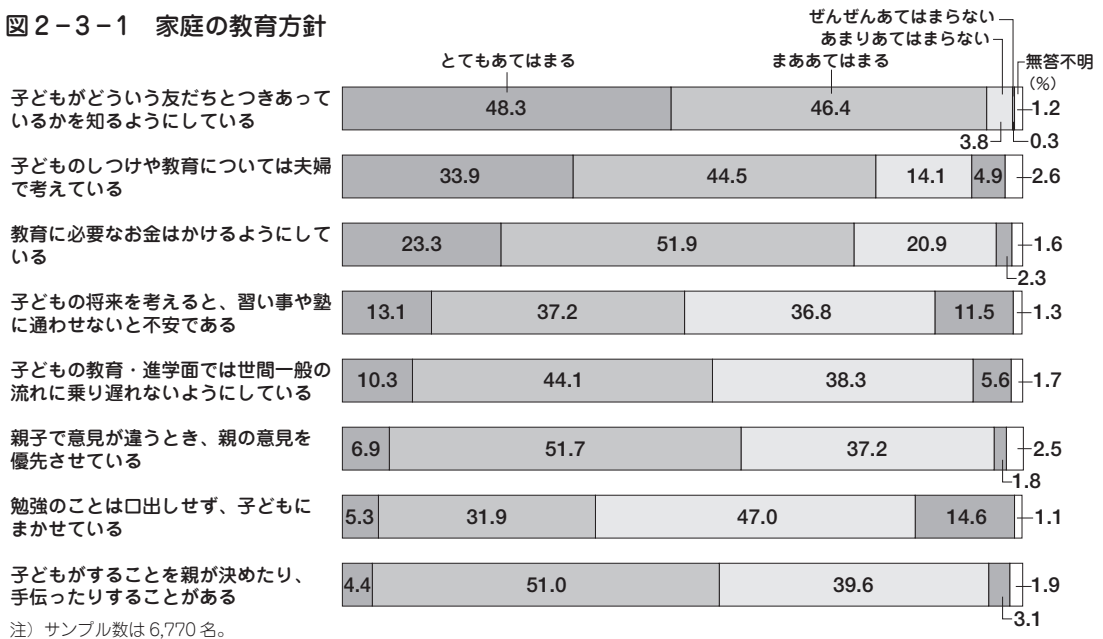


図2-3-2 家庭の教育方針① (学年別)

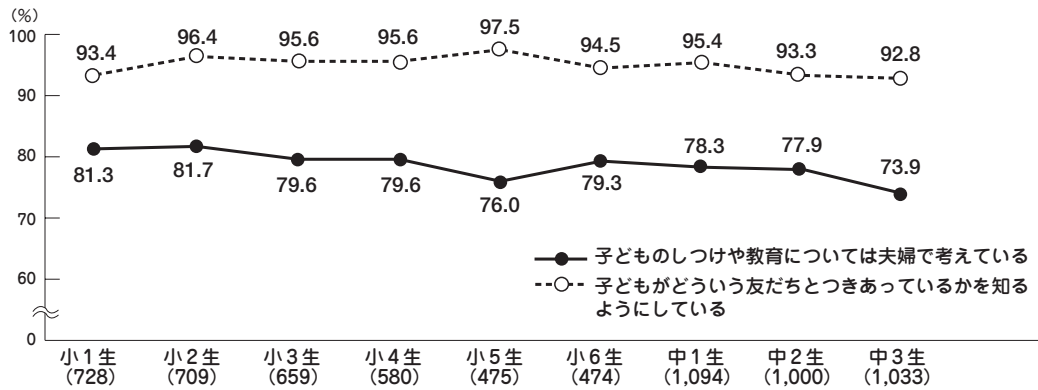
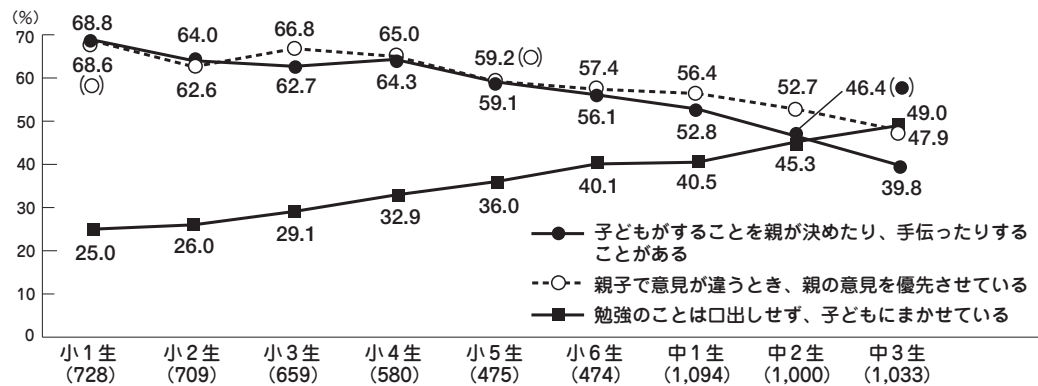


図2-3-3 家庭の教育方針② (学年別)



● 進学に関する方針

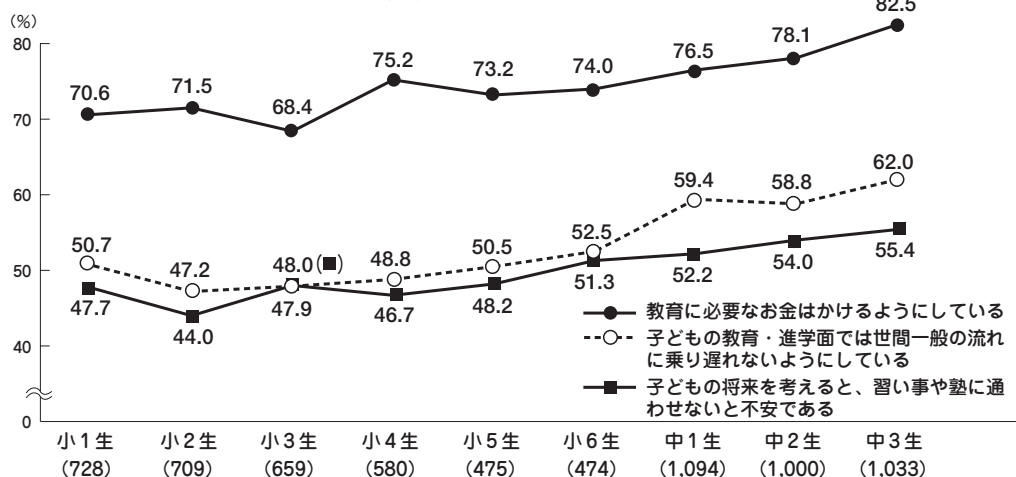
子どもの進学や受験は子育て中の親にとっての一大事である。図2-3-4では進学に関する方針をたずねた3項目について「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計の割合が学年上昇でどう推移するかを示した。「教育に必要なお金はかけるようにしている」は小1生でも70.6%、中3生では82.5%の母親がそのように考えている。この項目は図2-3-1においても第3位という上位にあり、いかに母親がわが子の未来に向けて、心や学力のしつけに熱心であるだけでなく財の投入を惜しまないかがわかる。そしてそれと結びついているのは、「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」に表れてくるような、子育て中の母親をとりまく進学状況である。今や塾に行くことは当たり前の時代ととらえられているようだ。今回は、このような進学に関する熱心さが小学校低学年の母親にまで広がってきているという傾向があり、注目される。これについては後述の経年変化② (p.50) で取り上げる。

● 減少した夫婦協力の子育て—経年変化①

つづいて、経年変化をみていこう。前節と同じように、平均値で過去2回の調査結果と比較した。「とてもあてはまる」を4点とし、1点ずつ下げて「ぜんぜんあてはまらない」を1点として設定した。

まず、基本的なしつけ方針である「子どものしつけや教育については夫婦で考えている」は、小学校低学年では02年調査より高いが、その他は低下している(図2-3-5)。とくに中学生は02年調査からの減少幅が大きく、否定的な回答が多い。「子どもがどういう友だちとつきあっているかを知るようにしている」「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」はすべての学年段階で高くなっている。また、「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」も小学校低学年と高学年を除き98年調査から増加傾向がみとれる(図2-3-6~8)。1節で夫婦協力しての子育ての重要性について触れたばかりであるが、これが今回、とくに中学生の母親で減少したことは大変気になることである。新しく加えた配偶者との関係の質問とともに、今後の動きに注目したい。

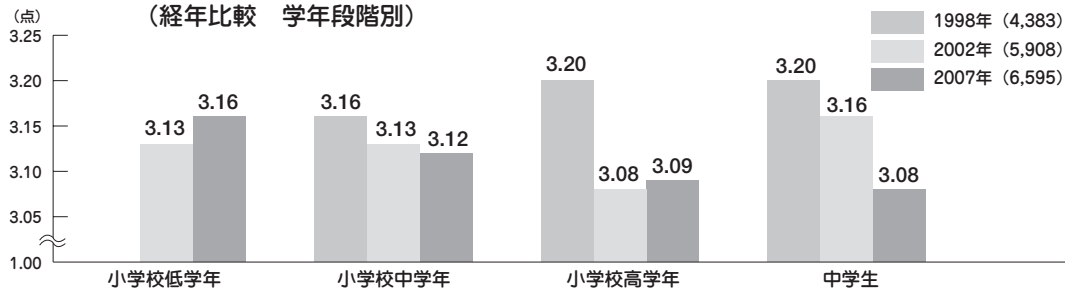
図2-3-4 家庭の教育方針③ (学年別)



注1) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

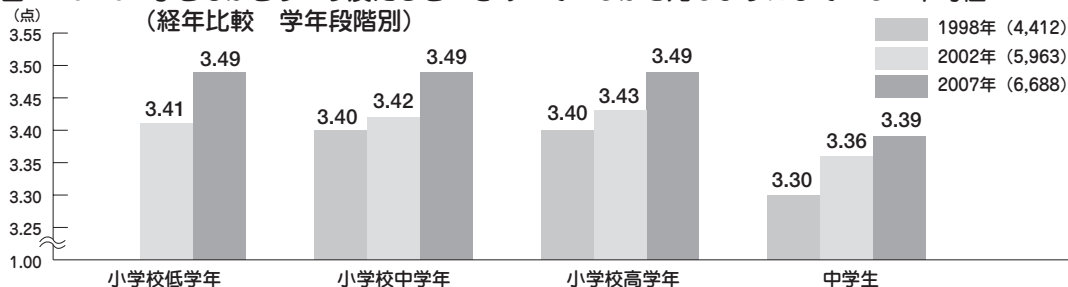
注2) ()内はサンプル数。

図2-3-5 子どものしつけや教育については夫婦で考えている・平均値
(経年比較 学年段階別)



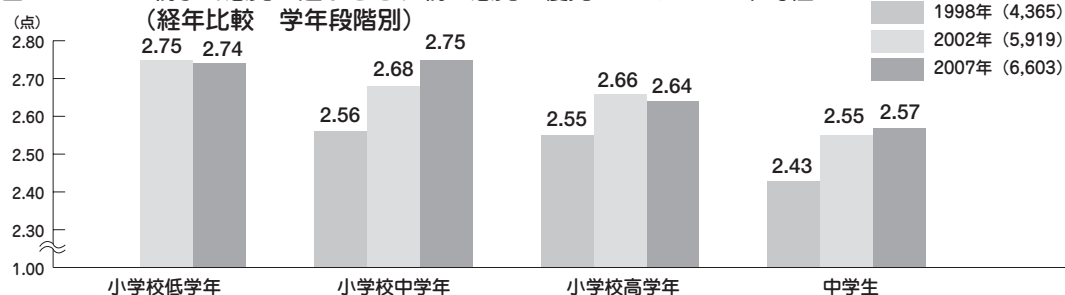
注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。

図2-3-6 子どもがどういふ友だちとつきあっているかを知るようにしている・平均値
(経年比較 学年段階別)



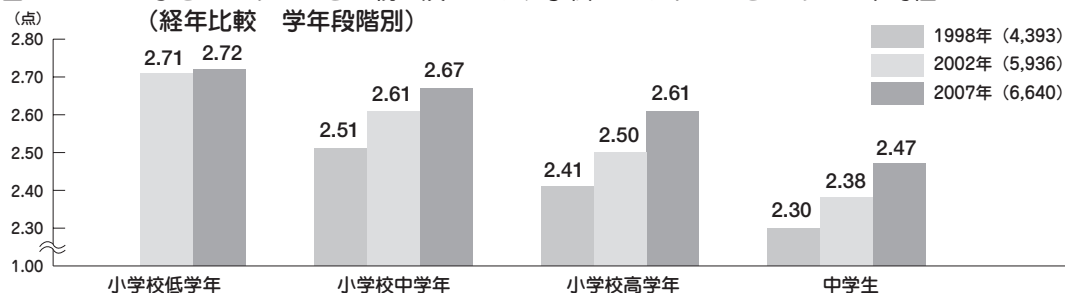
注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。

図2-3-7 親子で意見が違ふとき、親の意見を優先させている・平均値
(経年比較 学年段階別)



注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。

図2-3-8 子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある・平均値
(経年比較 学年段階別)



注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。

● 進学準備熱はさかんに一経年変化②

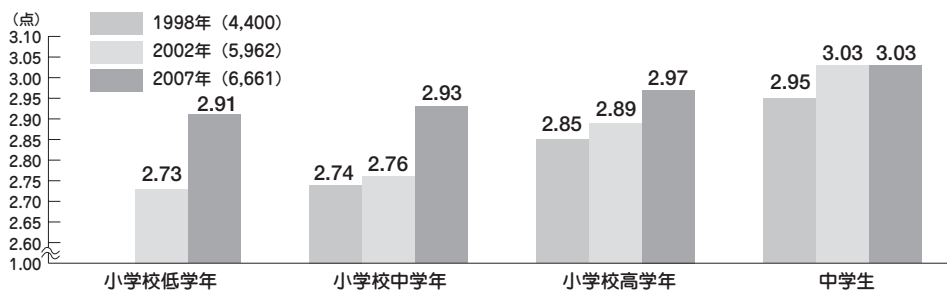
「教育に必要なお金はかけるようにしている」は02年調査に比べ今回は小学校低学年、中学年での伸びが大きい(図2-3-9)。進学準備熱が低学年にまで拡大する傾向がみえてきたといえそうである。「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」についても小学校低学年、中学年ともに02年調査より増加(図2-3-10)、「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」も、小学校低学年、中学年で増加している(図2-3-11)。

これら「教育熱心度」を示す3項目をまとめた平均点で98年調査から07年調査までを比較してみよう。「とてもあてはまる」4点から「ぜんぜんあてはまらない」1点までを与えて算出した平均値を学年段階別に示したのが図2-3-12である。98年調査から02年調

査への変化は中学生で大きかった。しかし、02年調査から07年調査への変化は小学校低学年と中学年について大きいことがわかる。このように、よい学校への進学のための準備やしつけに熱心な母親が、これまでのような中学生だけでなく、小学校低学年にまで広がってきたという明らかな傾向が読み取れる結果となっている。

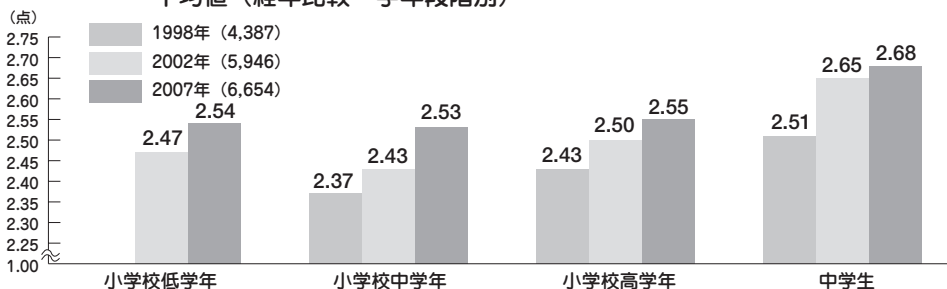
確かに、いわゆる全国学力テストの実施、中学受験、学校選択制の広がりなどを背景として、親にとって、よい学校を選ぶことが必要だという意識の高まりがあるように見受けられる。子どものための学校選びを特集テーマに取り上げる雑誌や理想の学校を探して歩いた母親の体験をもとに書かれた単行本も見かけるようになった。そのような教育、学校を取り巻く社会背景とこの変化が関連している可能性は高い。

図2-3-9 教育に必要なお金はかけるようにしている・平均値(経年比較 学年段階別)



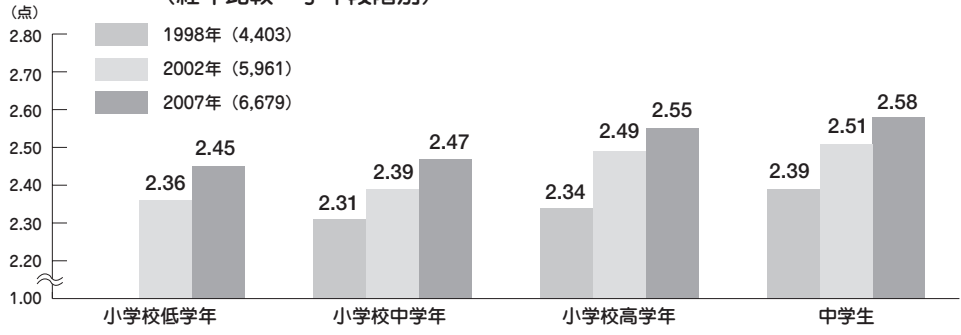
注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-3-10 子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている・平均値(経年比較 学年段階別)



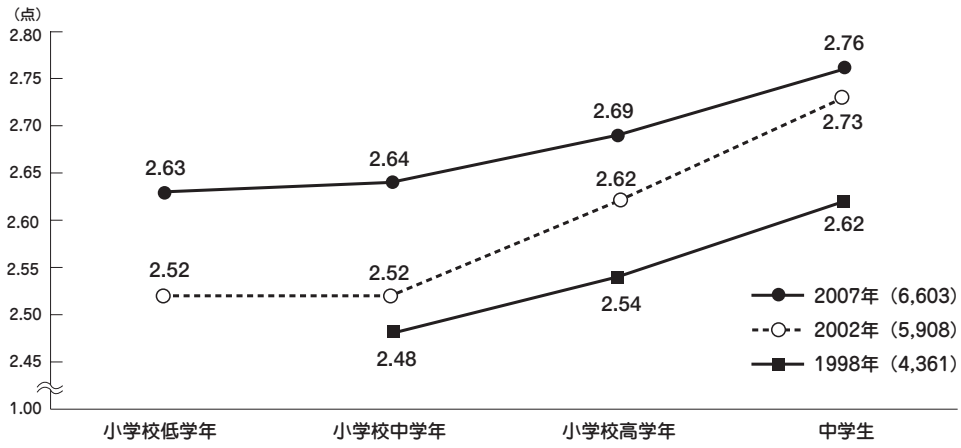
注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-3-11 子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である・平均値
(経年比較 学年段階別)



注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。

図2-3-12 進学熱心度得点・平均値 (経年比較 学年段階別)



注1) 平均値は「教育に必要なお金はかけるようにしている」「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」の3項目について、「とてもあてはまる」4点～「ぜんぜんあてはまらない」1点として無答不明を除いて算出した。
 注2) 1998年調査では小学校低学年の保護者は調査対象に含めていない。
 注3) () 内はサンプル数。